

『ライ麦畑でつかまえて』の英語（その七） （最終回）

杉 浦 銀 策

方言的用法 'on account of' について

『ライ麦畑でつかまえて』にはもう一つ 'on account of' という接続詞句の方言的用法が見られる。これもやはり読者に少しばかり異様な感じを与える用法である。

I wasn't supposed to come back after Christmas vacation, on account of I was flunking four subjects and not applying myself and all. (6; 4)

ぼくはクリスマスの休暇が終わっても学校へ戻らないことになっていた。四課目も落として、しかも勉強に精を出すことをしないとかなんとかいなのがその理由だ。

'on account of' は Sweet の文法用語でいえば、group-preposition（群前置詞）ということで、前置詞的用法が普通であることはいうまでもない。にもかかわらず『ライ麦畑』ではこのように接続詞句として用いられる例が延べ5回も登場する。むろん次の2例に見られるように普通の前置詞句としても用いられる。

"Well, no, not exactly, but I can usually get them [=drinks] on account of my heighth," I said. (75; 57)

「いいえ、そりゃ許されるってわけじゃないけど、ぼく、背が高いものですから、大抵はありつけるんです」

She was still being snotty on account of her ankles when she was skating. (168; 130)

彼女はスケートをしていたときの足首のことで、まだふてくされていた。

'on account of' の接続詞的用法についてわが国の英和辞典を調べてみると、まず『リーダーズ英和辞典』では「[conj.] (南部) ... であるために、... だから」というまことに簡潔な説明が載せられている。

『ランダム英和大辞典』第二版の記述は、

on account of ... (1) ... の理由で、によって (because of より文語的、非標準的用法では後に節がくることがある)

となっている。

『ジーニアス英和大辞典』では、「because ofの方が普通」と説明した後、次のような語法の解説を行なっている。(後半の説明に引かれている用例は、いうまでもなく『ライ麦畑』からのものである)

語法 ((主に米略式)) では (1) のこの of はしばしば省略される: Would you say no on ~ my age? (結婚を断られて) 年のことが理由でいやと言うのですか。(2) また接続詞にも用いられることがある: On ~ of it was Sunday, there were about three shows playing. 日曜だったので芝居は3つぐらいしかやっていなかった。

これらについて若干コメントしてみると、接続詞的用法としての'on account of'については、『リーダーズ英和辞典』の「南部」という注釈はたんに「方言的」と改めた方がよいかもしれない。また前置詞的用法としての'on account of'について『ランダム英和大辞典』は「because of より文語的」、そして『ジーニアス英和大辞典』は「because ofの方が普通」という説明がなされている。今日一般的にあって、'because of' が'on account of' よりも圧倒的に頻繁に使用されるようだが、他方、前置詞句としての'on account of'については、『ハック・フィン』や『ライ麦畑』における用い方を観察していると、こちらの方が「より文語的」と言い切ることができるかどうか、若干疑問が残る。少なくとも『ライ麦畑』では'on account of' はむしろ極端に口語的表現としての効果を表わすために使用されているようにさえ感じられる。たとえば『ライ麦畑』の第8章では、上記ホールデンの "on account of my height" という言い方を聞いた Mrs. Morrow は、

"I hope you weren't called home suddenly because of illness in the family." (75; 58)

「まさかあなた、だれかご家族にご病人が出て、それでうちに呼び戻されたのではないでしょうね」

というぐあいにホールデンとは対照的に、より正統的な(あるいはより上品なと考えられる) 'because of' を使っているからである。『ライ麦畑』全体を通して 'because of' はこれ一回しか登場せず、それも中流上層階級のモロー夫人の口を通してのみである。あとはすべてホールデン少年のべらんめえ口調とともに使用される。

ちなみに『ハック・フィン』では、'because of' はまったく登場せず、すべて 'on account of' で埋めつくされる。他方ホールデンはもっぱら 'on account of' をのみを用い、その口語性をあらわにし、さらにこの前置詞句を接続詞句としての機能にまで拡大することによって、自己の言葉遣いのスラング性を前面に打ち出そうとしているかにも見えるのである。そしてこれまた前述の 'like as if' の場合と同様、彼の文学的レトリックの一種と見做すことができるのかもしれない。そうはいっても、しかし、ホールデンは 'on account of' の 'of' を落とすことまでの極端な方言性をむき出しにすることはしない。

'of' の脱落は、小西友七氏が『アメリカ英語の語法』の「前置詞・接続詞の on account」という項目で指摘しているように、ユダヤ系作家マラマッドなどに見られるものである。引用はマラマッドの短編「魔法の樽」からのもの。

"If Rothchild's a daughter wants to marry you, would you say on account her age, no?"¹¹

「ロスチャイルドのお嬢さんがあんたと結婚したいと思っても、相手の年齢のせいでいやだと言うつもりかね」

上記『ジーニアス英和大辞典』の 'Would you say no on account my age?' は、このマラマッドの会話を見本にしたものである。

このあたりで、研究社の『新英和大辞典』にも触れる必要があるのだが、その前に英米の辞書を少しばかり覗いておきたい。

OEDSは 'on account of' の接続詞句の用法について次のような説明と用例を記載している。

on account; account of : ellipt. for 'on account of (the fact that)'. slang.

1939 E. Waugh *Mr. Loveday's Outing* 44 The purser who's different on account he leads a very cynical life. (このパーサーは大変にシニカルな生き方をしているため人と違ったところがある)

この辞書にはさらにもう3つの用例を挙げているが、いずれもイギリスのものばかりで、『ライ麦畑』からの引用はない。

他方、アメリカ英語の方言辞典である *ADD* は次のような説明と用例を記載している。イギリスの用例よりも少しばかり時期が早い。

on account of . Because; — also without *of* .

1933-6 s.w. Mo. -n.w.Ark. Them kids has been a-snubbin'..on account somebody..run over th' pup. (子供たちは誰かが子犬を轢いたというのでずっと泣きつづけているんです) [snub = sob]

1938 Fla. He ain't full weight, account of his stomach bein' shrunk. Rawlings *Yearling* 31 (あの熊は [冬眠のために] 胃が縮んで、まだ肉が十分ついていないんだ)

またしても『子鹿物語』の登場である。この辞典は 'on account of' の 'on' ないしは 'of' のどちらかが省略されている例の双方を、しかも前置詞句と接続詞句の両方の用法にまたがるかたちで引用しているわけだが、その用例は延べ5つ。いずれも南部諸州のものばかり。私自身が出合った例は『子鹿物語』のほかにスタインバックの作品のもの。次の最初の例は『二十日ねずみと人間』(1937)、二番目の例は『怒りの葡萄』(1939)からのものである。

"The guys said on account of the nigger's got a crooked back, Smitty can't use his feet." ²

「連中は、そのクロンボが[馬に蹴られて]せむしになったため、スミッティは足を使ってはいけないと言ったんだ」

"I got seven years, account of he had a knife in me." ³

「あいつにナイフを刺されたのがきっかけで、おれは七年もくらっちゃった」

そもそも接続詞句としての '(on) account (of)' は、イギリスとアメリカのどちらで先に出現したのか。これがはっきりしない。どうやらアメリカの方に軍配が上がるようなところもある。

安藤貞雄氏は 'On account of + Clause' の用例を『ライ麦畑』から3つ挙げたあと、次のように述べている。

いずれの例も、Holden のものであるが、このように *on account of* のあとに節をつづける用法は、まだ Webster³ にも採録されていない。しかしそうかと言って、Holden 特有の語法ではけっしてない。アメリカのくだけた英語にはまますみ見受けられる用法である。豊田実氏の著書[『アメリカ英語とその文体』 p.149] に、次の用例が見える。⁴

(4) Maybe they wouldn't let him see me on account of we really were twin brothers. — A.T. Harris, *Portrait of Harry* (あの人たちが私と彼を会わせないようにしたのは、たぶん、私たちが実はふた子だったからでせしよ)

残念ながら、今のところ A. T. Harris という作家は、経歴が分からないので用例の年代を特定できない。

また『アメリカ英語の語法』の小西友七氏は上述の項目で、次のように述べながら、同じくマラマッドの「魔法の樽」からの引用を行っている。

これがさらに、このまま接続詞として *because* と同じ意味に用いられることもある。この *on account (of)* の接続詞用法は、本来は南部アメリカ英語特有の表現であったが、逐次 New York, Chicago などの大都市に広がって行ったといわれる。

"Of course, she is a little lame on her right foot ... , but nobody notices on account she is so brilliant and also beautiful." — *ibid.* (「なるほど右足が少しびっこですが、彼女はあんまり頭がよくてそのうえきれいなもんですから、だれも気がつかないんですよ」)⁵

氏は言葉をつづけて「この語法はイギリスでも用いられていることはつぎの

例でもわかる」と述べながら、*OEDS*にも挙げられているイヴリン・ウォーの『囁きの霊園』(*The Loved One*, 1948)から引用する。またさらに「しかし、この用法が、はるかにアメリカの口語に多いことは、*of*を省略しないものとの *on account of* がアメリカの口語に多いことをみても察せられるであろう」と言い、『ライ麦畑』や *J. Street, The Last Escape* からの引用を行ったり、'on'も 'of'も省略された *G.V. Higgins, The Friends of Eddie Coyle* からの例をも紹介している。

尾上政次氏の『現代米文法』ではさらに古い例が挙げられている。

They'd figured (=figured) on making him their victim *on account* (=because) he was the handiest. -W. James, *Smoky* [Curme] [[彼が一番手近な男だったので] の意。方言的] 7

William Roderick James (1892-1942) の *Smoky, the Cowhorse* (1926) は今日わわれが入手できない作品だが、1920年代から30年代にかけて英語の文法書を著した著名なアメリカの言語学者 George Oliver Curme が20年代の 'on account' を記録してくれたというわけだ。

一方 'on account of' (= because) はマーク・トウェインには出てこないようだ。少なくとも『ハック・フィン』には一度も登場しない。それどころか次の例の 'on account of its being the law' に見られるように、規範文法にきっちり当てはまる文章になっている。「無学」のハック少年らしからぬく文法的な語り口というべきか。

... how a valley was different from a common servant, and had to go to church whether he wanted to or not, and set with the family, on account of it's being the law. (XXVI, 224)

従者というものは普通の召使と違って、いやでもなんでも教会に行つて家族の者と一緒に席につかなくてはならない。法律でそうなっているからだ。

さらにハックは "on account of woods and flowers ..." のようなオーソドックスな言い方のほかに、'on accounts of' というなんとも不可解な言い回しも行なう。 *A Mark Twain Lexicon* はこの点に注目し、次のような用例を引いている。

account, sb. on accounts of . [? A B¹ E] "*I forgot all about driving slow on accounts of being glad and full of thinking*" 1884 HF xxxiii 339 (Pl. form not OED W S C) (嬉しくなっているいろいろと考えごとをしていたもんだから、ゆっくり走らせることなんてすっかり忘れていた)

このレキシコンの編者はこの句の説明ができず、困惑の様子である。記号 [?A=Unrecorded or Doubtful Americanism.] がそれを示している。このように複数形を含む 'on accounts of' は黒人の Jim も使用するし、'on account of' との使用上の区別を見出すことは難しい。マーク・トウェイン流の語法の謎の一つといえるかもしれない。

話を『ライ麦畑』に戻すと、'like as if' の場合と違って、ホールデンが 'on account of' (= because) を使用するのさほど意外なことではない。ただ以下の例に見られるように、同ページとっていいくらいの間隔で 'on account of' と 'because' の双方を使用していて、多分に恣意的な使い方とってよいかもれない。

On account of it was Sunday, there were ... (151; 116)

Everybody was all dressed up, because it was Sunday, ... (150; 115-6)

以上のように、どうやら 'on account (of)' = because は 20 世紀に入ってから出現した語法ということになるのだろうが、19 世紀後半の用例は本当に見つからないのだろうか。今後の課題である。

ここまできてわれわれは改めて研究社の『新英和大辞典』を参照してみることにする。じつは『新英和大辞典』第 5 版 (1980) における 'on account (of)' の記載は次のようになっていて、まことに物足りないものであった。

on account (3) 《俗》 = on ACCOUNT of .

on account of (1) ... の理由で、... のために、... によって (because of) .

(2) ... のために (for the sake of)

ところが同じ辞典第 6 版 (2002) の同じ項目を調べてみると、次のように改訂

されている。

on account (4) ... 《俗》... であるために (because). [《1936》《略》← on account of the fact that

on account of (1) ... の理由で, ... のために, ... によって (because of)

(中略) (2) ... のために (for the sake of). (3) = on ACCOUNT (4).
《1647》]

このように今日 'on account of' = because についてはほとんどすべての辞書が取り上げているのだから、われわれは改めてこれを問題にする必要がなさそうなのだが、では次の例に見られる 'on account as' = because は如何であろうか。

"As far as I understood all the whites were to be massacred, except the Quakers, the Methodists, and the Frenchmen, and they were to be spared on account as they conceived of their being friendly to liberty, and also they had understood that the French were at war with this country."⁸

「私が理解していた限りにおいて、白人はクエーカー教徒、メソヂスト派の人々、そしてフランス人を除いてすべて虐殺されるはずでした。これらの人たちは自由に対して好意的であると [黒人奴隷たちが] 考え、またフランス人はアメリカと交戦状態にあると思っていたからです」

これは、1800年の夏の終りごろ、"General" Gabrielという黒人を首謀者とする大規模な黒人奴隷の反乱事件がヴァージニア州で起こった(ただし未遂に終わった)際に、裁判でなされた黒人奴隷の証言に見られる言葉である。Ben Woolfolkという名前であるという。ここに見られる 'on account as' = because は、いまだかつて一度も辞書に取り上げられたことのないものだと思う。この語法は一体どのように説明したらよいのだろうか。

[注]

- 1 Bernard Malamud, *The Magic Barrel* (1958; Dell, 1966), 172. Cf. 小西友七『アメリカ英語の語法』(研究社・昭和56年), 339.
- 2 John Steinbeck, *Of Mice and Men*. Cf. *Of Mice and Men, Cannery Row* (Penguin Books, 1955), 23.
- 3 John Steinbeck, *The Grapes of Wrath*, 35.

- 4 安藤貞雄『英語語法研究』、153.
- 5 小西『アメリカ英語の語法』、339.
- 6 同書、340.
- 7 尾上『現代米文法』、142
- 8 Quoted in Winthrop D. Jordan, *White over Black: American Attitudes Toward the Negro, 1550-1812* (W.W. Norton, 1977), 394.

'please' と分離不定詞

『ライ麦畑』に次のような文章が出てくる。

I mean if I ever sat behind myself in a movie or something, I'd probably lean over and tell myself to please shut up. (174 ; 134)

つまり映画館なんかでぼくがうしろの座席に坐っていたら、おそらくぼくだって身を乗り出して、静かにしてくださいよってつぶやくだろうってことだ。

この文章に見られる 'tell myself to please shut up' の 'please' を副詞と考えれば、当然上の 'to please shut up' は英文法のいわゆる「分離不定詞」の一種ということになるだろう。

『ランダムハウス英和大辞典』では、どういふわけか、この語法を取り上げていない。研究社の『英和大辞典』第5版(1980)はこの 'please' を自動詞として扱い、次のような用例だけを記載している。

I want you to ~ be quiet. 恐れ入りますがお静かに願います

他方『ジーニアス英和大辞典』(2001)は 'please' を間投詞と見做し、次のような記載が見られる。

I'm asking you ~ not to do that. そんなことはなさらないでくださいとお願いしているのです / I asked her to ~ leave. 彼女に立ち去るように頼んだ (= I said to her, "P ~ 《やや古》 to) leave.") 《◆この2例のように不定詞と共に用いるのは主に《米略式》

さらに研究社『英和大辞典』第6版(2002)になると、この 'please' を副詞

として扱い、やや丁寧な説明をしている。

- (3) to 不定詞と共に用いることもある：I want you to ~ be quiet. 恐れ入りますが
 がお静かに願います (cf. Please be quiet. どうぞ静かにして下さい)。

『ジーニアス英和大辞典』に記載されている 'I asked her to please leave.' は、
 'I said to her, "Please leave."' という直接話法を間接話法に変換する際に生じた
 ものといえるのだろうが、'I said to her, "Please to leave."' を間接話法に変換す
 れば、'I asked her to please to leave.' となりそうだが、果たしてこういう構文
 が歴史的に存在したことがあるのかどうか。話し手の心理からいえば、'Please
 leave.' の 'please' は副詞ないしは間投詞、'Please to leave.' の 'please' は動詞とい
 うことになるのだが、私の感触としては、'Please to leave.' という表現があり、
 やがて 'to' が落ちて 'Please leave.' となり、しかる後に 'I asked her to please
 leave.' という構文が発生したと考えるのが自然でうと思う。ただこれは、そ
 もそも 'I asked her to please leave.' という構文がいつ、どこで最初に出現した
 かを突きとめない限り決着がつかない問題なのかもしれない。

ただ私自身が出くわした最も古い用例は、後に述べるように1920年代のも
 のにすぎず、結論的なことはいえない。

ところで、安藤氏の『英語語法研究』の第5章「文法探索」には「47 話法
 の口語形式」という項目があって、その中で氏は「...現代の小説類を読んでい
 ると、...直接話法をそのまま間接話法に持ちこんだような形式が、盛んに使用
 されているのに気づく」¹と述べ、「教科書文法では許されない please の据え
 置きが見られる」²という。そして命令文の場合として次のような例文を引い
 ている。

I ... say *leave it outside the door please*. — Hemingway, *A Farewell to Arms* (私
 は、それをドアの外へ置いといてくださいと言う)

そしてさらに次のような脚注をもほどこしている。

なお、please については、次の例も参照のこと。I asked her to please give
 her the note. - Salinger, *The Catcher in the Rye* (その女の子に、彼女にその手
 紙を渡してほしいと頼んだ)³

この引用文における最初の 'her' は「女の子」ではなく「老婦人」(some old lady) のことであるが、それはともかくとして、サリンジャーはこのような 'please' の使い方が好きらしく、他の作品にも登場する。

... and one from my mother-in-law, asking me to please send her some cashmere yarn first chance I got away from "camp."⁴

[それは] 義母からの手紙で、「訓練」が終わったら、できるだけ早い機会にカシミアの生地を送ってくださるようお願いしますとあった。

I beg you both, and perhaps Miss Overman, should you drop by at the library or run into her at your leisure, to please run a cold eye over all that follows ...⁵

ぼくはあなたたち二人に、そしてお暇な折に図書館に立ち寄ってオーヴァマンさんに出会ったときには彼女にもお願いしたいと思うのですが、これから書かれるすべてのものに冷たい視線を走らせたいだきたく ...。

ところで今日副詞として使われる 'please' は、周知のように本来は動詞であった。つまり非人称動詞として 'may it please you' や 'if it please (so) you' などと使われ、またいわゆる 'Impersonal it' が状況によっては省略されることもあり (たとえばドイツ語の 'Es hungert mich.' → 'Mich hungert.' のように)、その結果 'please you,' や 'so please you' の出現となった。そしてこれと同時に目的格の 'you' が主格扱いとなり、次の引用文に見られるような言い方となった。もちろんこの場合の 'please' は 'be pleased' の意味となる。

"If you kindly please to let me keep upright, sir, perhaps I shouldn't be sick, and perhaps I could attend more."⁶

「旦那様、ぼくの体を真っ直ぐにおこしておいてくだされば、気分がわるくなることもなく、おっしゃることがもっとよく聞けるのですが」

この引用文の "If you kindly" を省いて命令文にすれば、次のような例文となる。ただ上の文が十九世紀の Dickens のものであるのに対して下の文が 18 世紀のアメリカ最初の小説家 William Hill Brown のものということで、時代が前後するようで恐縮なのであるが、この場合たまたま私の目に触れた例を挙げたまでのこと。ここでは 18 世紀と 19 世紀の区別について詮索する必要はないで

あろう。

Please to tell Mr. Worthy, he may continue to write, and that I will condescend to read his letters.⁷

どうかワージーさんに、これからもお手紙を書きつづけてもけっこうですし、また私も喜んでお手紙を読ませていただきますとお伝え下さい。

この文章を否定文に変えるときには、'Please not to tell...' というぐあいに to-infinitive の直前に 'not' を挿入すればよい。さらに 'Please to not tell ...' とすれば分離不定詞の到来となるのだが、こういう構文が果たして存在したことがあるのかどうか。おそらく存在しなかったと思われる。ただここで思い出されるのは、トウェインの『ハック・フィン』の主人公ハックおよび逃亡奴隷ジムが 'Please to don't do it' といった言い回しをすることがあるということだ。これはまことに奇異な構文である。

"Please to don't poke fun at a poor girl like me, mum." (XI, 89)

「お願いですから、奥さん、あたしみたいな可哀そうな女の子をからかうのは止めてください」

ただしこうした変則的な言い方はハック少年と黒人ジムに見られるもので、他の人物はまっとうな言い方をする。——'Oh, please don't, boys; I swear I won't ever tell!' (XII, 97) (「お願いだから、止めてくれ。決して告げ口などしないから」)

とにかく以上のような経過をたどっているうちに、やがて 'Please to tell...' の 'to' も消え、'Please tell ...' となり、'please' は副詞化してゆく。そしていったん副詞化されると、それが 'to' と動詞の間を引き裂くかたちで中に入り込んでゆく。これが 'please' にまつわる「分離不定詞」現象の発生経緯である、と私は思う。かくして 'tell (ask or beg) to please + infinitive' の誕生となるのであるが、これもおそらく 20 世紀に入ってからの現象なのであろう。私自身が目にしたのは、次の 2 例である。最初の引用はヘミングウェイの父が息子に書いた手紙 (1920)、その次はドライサーの『アメリカの悲劇』(1925) からのものである。

I have just written your dear Mother... that I would write to you to please go over to Grace Cottage ...⁸

おまえがグレース・コテージに行ってくれるよう頼みの手紙を書くつもりだと ... たった今女房に書いたところです。

He must ask Jephson to please wire her so that she would not believe it.⁹

母がそれを信じることがないように、ジェフソンに頼んで是非とも [母宛てに] 電報を打ってもらわねば。

とにかくこのように私の目に触れた限りでは、残念ながら1920年代のものが最初の用例ということになる。ドライサーにあっては『アメリカの悲劇』以前の作品、たとえば『シスター・キャリー』（1900）[ノートン版だけでなくペンシルヴァニア版も含めて] や『ジェニー・ゲアハート』（1911）にはこの種の構文は登場しない。とにかく20世紀に入ってさかんに使われるようになった口語的表現のようである。

だが今日 'please' を含む分離不定詞は必ずしも口語的表現ではなくなり、正式な文章語になりつつあるようだ、ということも注意しておいてよいであろう。それというのも次の例に見られるように学術書の文章にまで侵入してきているからだ。

He asked Bliss to please tell him "when the matter ought to be ready, whether it should have pictures in it or not, and what amount of money" he "might possibly make out of it ..."¹⁰

トウェインはブリスに対して「準備を整えるのはいつ頃がよいか、挿絵を入れた方がよいかどうか、また収入はどれくらいになるだろうか」などについて教えて下さいと述べた。

The unhappy Narragansetts, after their enforced treaty in Connecticut, appealed to their old ally to please "ratifie that promise made to them [by Massachusetts] after the warrs viz: the free use of the Pequet Country for their hunting, etc., " ...¹¹

追いつめられたナラガンセット族はコネティカットで条約を無理強いされた後、かつての同盟者 [たるイギリス人たち] に「戦争後 [マサチューセッツによって] 彼らになされた約束、つまりピークオット族の土地を狩猟そ

他のことで自由に使用してよいという約束をどうか批准して」下さいと懇願した ...。

というわけで、もうそろそろ『ジーニアス英和大辞典』に見られる《米略式》といった説明用語は止めるべき時期にきているのかもしれない。

したがってまたわれわれは俗語や方言的表現としての分離不定詞については、むしろ次のような用例にこそ注意を向けるべきであろう。ここでは 'please' ではなく、上掲のハックにおける 'don't' と同様、'lets' までもがまるで副詞であるかのように to-infinitive を引き裂いて、割り込んでくるからだ。

"... and all the folks knowing it and me trying to get Eupheus to lets move away because it was just that circus man that said he was a nigger and maybe he never knew for certain, and besides he was gone too and we likely wouldn't ever see him again."¹¹

「... ほかの人たちはみんな知ってしまったし、わたしはユーフェーズに引越しましょうと言って、立ち退かせようとしたんです。だってその男を黒ん坊だと言ったのはあのサーカスの人だけだし、それだって確証があったわけでないうえに、引き揚げてしまって二度と会えそうになかったんですから」

[注]

- 1 安藤貞雄『英語語法研究』、293。
- 2 同書、295。
- 3 同書、259。
- 4 J. D. Salinger, "For Esmé — with Love and Squolar" in *Nine Stories* (1953; Bantam, 1964), 91.
- 5 Salinger, "Hapworth 16, 1924" (*New Yorker*, June 19, 1965), 32.
- 6 Charles Dickens, *Great Expectations* (1860-1; Penguin, 1961), 7.
- 7 William Hill Brown, *The Power of Sympathy* (1789; Ohio State Univ. Press, 1969), 78.
- 8 Clarence Edminds Hemingway to Ernest Hemingway, September 18, 1920. Quoted in Kenneth S. Lynn, *Hemingway* (Harvard Univ. Press, 1978), 119.
- 9 Theodore Dreiser, *An American Tragedy* (1925; Signet Classics, 1964), 665.
- 10 Justin Kaplan, *Mr. Clemens and Mark Twain: A Biography* (N.Y.: Simon and Schuster, 1966), 61.
- 11 Francis Jennings, *The Invasion of America: Indians, Colonialism, and the Cant of Conquest* (New York: W. W. Norton & Co., 1979), 259.
- 12 William Faulkner, *Light in August* (1932; Penguin, 1960), 284.

〈方言的表現 'like as if'〉 補遺

前稿〈方言的表現 'like as if'〉において私は、マーク・トウェインの『ハック・フィン』（1884; 1885）に登場する 'same as if' という語法がそう滅多にお目にかかる代物ではなく、なるほど *OEDS* には引用されてはいるが、他の文学作品からの用例は挙げられていないという趣旨のことを書いた。その後、私はトウェインのスケッチ風短編 "A True Story, Repeated Word for Word as I Heard It" (1874) を読んでいて、同じ 'same as if' に出くわし、少々驚いた。この補遺ではその驚いた理由について少しばかり書いてみたい。

"A True Story" と題されたこの短編は、『ハック・フィン』が出版される 10 年前の 1874 年に、トウェインが以前に奴隷であった Mary Ann Cord という年老いた黒人女からその悲劇的な半生の一コマを語ってもらい、それを忠実に筆記して出来上がったものである（少なくともトウェインはそう語る）。したがってこの物語のほとんど全編近くがアメリカの黒人方言によって語られており、19 世紀アメリカの黒人方言がどのようなものであったかよく分かる。

さてまずこの物語からの 4 つの引用文を見ていただこう。

- 1) — an' we loved them chil'en jist de same as you loves yo' chil'en.
— だんなさまがお子さんたちを可愛がるのとまったく変わりなく、わたしどももこうした子供たちを可愛がっていました。
- 2) ... an' I up an' tole 'em 'bout my Henry, dey a-listenin' to my trouble jist de same as if I was white folks; ...
... わたしは思い切って将校さんたちに息子のヘンリーのことを話してみました。するとみなさんはわたしがまるで白人であるかのように、わたしの悩みごとに耳を傾けてくれました。
- 3) ... but den he went to smilin' ag'in, same as he was befo'.
... しかしそれから彼は以前と同じようにもう一度笑顔に戻りました。
- 4) I was a-stoopin' down by de stove, — Jist so, same as if yo' foot was de stove, ...¹
わたしはストーヴにかがみこみ——ちょうどだんなさまの足がストーヴであるとしたら、今と同じ状態で ...。

1) と 3) は英和辞典にも見られる普通の語法である。たとえば研究社の『新英和大辞典』第六版 (2002) で 'same' の項目を覗いてみると、つぎのような説

明と用例が記載されている。

adv. [通例 *the* ~] 同様に (中略) *They do not think the ~ as we do.* 彼らは我々と同じようにものを考えない / (中略) *the* を省くのは《口語》: *He speaks with a slight lisp, ~ as his brother (does).* 兄さんと同じようにちょっと舌足らずだ。

しかし2) と3) はすでに述べたように非常に稀な語法で、英和辞典には載っていない。しかも『ハック・フィン』では 'same as if' しか出てこないのに、短編 "A True Story" では 'same as if' と同時に 'the same as if' も見られて、なかなか興味深いものがある。

ところで今から 10 年ほど前に Shelly Fisher Fishkin, *Was Huck Black?* といういささか刺激的な研究書が出て、この中で著者は、ハック・フィンの vernacular の語りは黒人方言の影響を受けたものだと主張した。この研究書はトウエイン研究者にとってかなり instructive なものであるらしいが、内容の細部については必ずしも問題がないわけではないようだ。たとえば Fishkin 女史は黒人方言の一例として 'disremember' (= forget) を取り上げる。

女史の述べるところによると、マーク・トウエインは 1871 年の 1 月か、あるいは 1872 年の 2 月に中西部で講演旅行をしていた折にある田舎町で宿を取り、そこのホテルで食事を出した Jimmy という名の黒人少年がいろいろな世間話を聞かせてくれたという。そこでトウエインはその話をそっくりそのまま記録し、それを "Sociable Jimmy" と題して 1874 年 11 月 29 日付けのニューヨーク・タイムズ紙に発表した。そしてそこにはつぎのような黒人少年の語りの文が出てくる。

Hoss is what dey mos' always calls him, but he's got another name dat I somehow disremember, it's so kind o' hard to git de hand of it.²

みんな大抵その人のことをホスと呼んでるけど、もう一つ別の名があるんだ。ただおれちょっとその名前を度忘れしちゃって。手掛かりをつかむのがなかなか難しいもんでね。

女史はこの中に見られる 'disremember' を紹介しながら、ハック・フィンにも "I disremember her name." (Chap. XIII) が見られると言う。つまり 'disremember'

は元来黒人方言の語で、ハックもその影響を受けているというわけだ。さらにまた女史は、James Harrison という学者がその昔すでに "Negro English" [Anglia 8 (1884)] の中で 'disremember' を "Specimen Negroisms" の一つとして考えていたと主張。いやそればかりではない。女史がたまたま引用してある Joel Chandler Harris (1848 - 1908) の "Uncle Remus" でも 'disremember' が用いられているし、³ 現代黒人女流作家トニ・モリソンの *Beloved* (1987) にも見られるという。⁴

しかし考えてみれば、'disremember' が黒人方言の語であるという主張はずいぶんと乱暴な話だ。だいいち1933年に出た昔の古い *OEDS* にはすでに "Earlier and recent U.S. examples" という説明付きで1815年の用例が挙げられており、私自身の記憶に残るものとしては、つぎのような用例がある。

"... ; how long did you live in the family of Birch ? "

"I disremember the precise time, but it must have been hard upon nine years; and what better am I for it all ? " — J. Fenimore Cooper, *The Spy* (1821), Chap. XXIII.

「... あんたはバーチの家に住むようになってから何年くらい経つのかね？」

「正確な年月は忘れたけど、九年近くだと思いますよ。だからといってあたしの値打ちがどれくらい上がるというの？」

フェニモア・クーパーの『スパイ』は独立戦争時代のニューヨーク州を舞台として繰り広げられる物語だが、私はここでこの引用文を含む版とページ数を記すことができない。およそ10年ほど前に講義のために駒沢大学図書館から借り出して読んだのだが、今もう一度借り出してページ数を確かめるのも億劫な気がする。ただその時の私のメモには、「'disremember' を含む受け答えの言葉は Katy Haynes という35歳になる家政婦のものである。ただしこの女の生れや育ちについては明らかにされていない」とある。おそらくニューヨーク州の田舎育ちの女性なのであろう。またすでに 'like as if' との関連において何度か言及しておいた M. ローリングズの『子鹿物語』（舞台はフロリダ州）にも 'disremember' が登場する。ということはつまり、'disremember' がれっきとした白人の方言ということになるのではないか。

要するに、ハック・フィンの使う 'disremember' が黒人方言の影響によるもの

だという Fishkin 女史の主張は強引すぎると思うのだが、他方女史はどういうわけか、'(the) same as if' については言及することをしない。すでに述べておいたように、*OEDS* (1982) では '(the) same as if' の用例としてトウエインの『ハック・フィン』からのものしか挙げておらず、また私自身も他の作家の用例に接したことがないため、ここで Fishkin 女史の方法を逆用してある大胆な（無謀な）仮説を打ち立ててみたい衝動に駆られる。

ここでわれわれがトウエインの作品以外にアメリカ文学のどの小説作品にも '(the) same as if' という語法が存在しなかったと仮定してみよう。するとつぎのような推測も可能になるやもしれない。一般に '(the) same as iff' という言い方は白人の間では聞かれないものであったが、たまたまトウエインが 1874 年に元奴隷であったという年老いた黒人女から '(the) same as iff' という黒人方言の言い方を聞いて、その後『ハックルベリー・フィンの冒険』の執筆に際してこれを白人少年ハックの言い回しに転用してみたのだと。

むろんわれながら呆れた推測ではある。もし '(the) same as iff' が白人世界を描いた他の小説作品にも見つかった場合にはいっきょに崩れ去る仮説なのだから。

[注]

- 1 Mark Twain, "A True Story" in
- 2 Shelly Fisher Fishkin, *Was Huck Black? — Mark Twain and African-American Voices* (New York: Oxford Univ. Press, 1993), 252.
- 3 *Ibid.*, 99.
- 4 *Ibid.*, 157.

おわりに

これまで何回かにわたって本誌『英米文学』に『ライ麦畑でつかまえて』における英語」と題してご覧のような雑文を發表させてもらってきた。このタイトルがいかにミスリーディングなものであるかは、私自身十分わかまえており、はじめから『ライ麦畑』の英語そのものの研究というよりは、この作品に登場する俗語的、方言的表現に英語史的考察を加えてみようというところに主眼があった。『ライ麦畑』の英語は『ハック・フィン』のそれと比較してみるならば、いかにも貧相なものであるということは、誰の目にも明らかなことであるからだ。したがって『ライ麦畑でつかまえて』の英語学演習」といったところが妥当な表題であったかもしれない。

ともあれ私はあと一年で駒沢大学を定年退職の予定。そこでもうこの辺りでこの雑文のシリーズを打ち止めにしたいと思っている。いかに趣味上のことだといっても、英語学を専門としない者がこのような駄文をいつまでも書き連ねるということは、ある意味では不謹慎なことだ。

むろん書きたいことはまだ残ってはいる。たとえばホールデン少年が口にする swearing (oath) の言葉 'Jesus H. Christ' もその一つである。これは John Steinbeck, *The Grapes of Wrath* (1939) や James Jones, *From Here to Eternity* (1951) その他にも登場し、類似のものとしては Jesus H. Particular Christ, Holy jumping Jesus など使われてきたらしいが、では 'H.' が何を表し、何に由来するかということになると、必ずしも自明なわけではない。わが国の荒地出版から出ている『サリンジャー選集3』の巻末には、いまは亡きあるアメリカ文学者の解説文が載せられてあるが、その中に「...くそれはまた何ということだ!」の意味で Jesus H. Christ! と叫ぶところがある。H は勿論 Hell のイニシャルであろうが」という言葉が見られる。私自身としては、'H.' = Hell よりも 'H.' = Holyの方がまだ説得力があると感じるのだが、一般には 'Jesus' に相当するギリシャ語のうちの最初の3文字 'IHS' (モノグラム) の 'H' に由来するといわれている。

とにかくこういった詮索にも少々飽きてきたので、これで『ライ麦畑』の英語に別れを告げようと思う。ただ振り返ってみて、以上のような考察を試みてきた結果として得られた唯一の収穫は、'on account as' (1800) というまことに奇妙な、あるいは稀有な接続詞句に遭遇したことである。これについては今後とも究明の旅をつづけてゆくことになると思う。歴代の『英米文学』編集委員たちにここで厚くお礼申し上げる。